

# 国産パプリカ周年栽培

## 県内で連携、安定販売へ

輸入品の割合が高く、国産の生産振興が期待される野菜のひとつがパプリカ。近年、商社による生産参入が見られるようになってきたが、その先駆けが豊通食料（船戸謙治社長、東京都港区）だ。2008年に農地所有資格法人のベジ・ドリーム栗原を設立し、翌年から宮城県で栽培を開始。現在は2つの太陽光利用型植物工場が稼働し、合計の栽培面積は国内最大級の約6畝。両農場を合わせて播種・育苗から出荷までを通年、一気通貫で行う。昨年からは県内のパプリカ生産2法人と連携し、生協などに共通パッケージでの販売を開始。県産のブランド力向上と安定販売につなげる。

豊通食料は、豊田通商グループの食料専門商社。青果では外食・中食

向きの加工トマトとパプリカを中心に扱う。もともと輸入パプリカ



ベジ・ドリーム栗原では宮城県内の2つの農場でパプリカを周年栽培する

を、1990年代の輸入解禁から扱ってきた。生産事業への参入は「安心で新鮮なものを」と、国産を要望するスーパーなどの声にこたえてのもの。宮城県栗原市の生産者とともにベジ・ドリーム栗原を設立し、0.7畝の農場（現在は売却済）で栽培を開始。2010年に栗原農場（栗原市、約4.2畝）と、13年に冬作の大衝（おおひら）農場（大衝村、約1.8畝）を開設。2農場をリレーさせて、通年供給を行う。

栗原農場には発芽室、育苗室、選果場を設置。さらに開設して間もなく、わが国の施設園芸では初となるグローバルGAPを取得した。大衝農場はトヨタ自動車東日本工場に隣接し、工場の廃熱を暖房に活用する。両農場で畝間を移動する作業車を使って収穫し、収穫した果実を自動搬送するなど省力化を図る。

収穫量は合計で年間約1030t。選果機でサイズ分けした後、人手による等級分けを行う。選果当日に東京と仙台にある倉庫に搬入し、顧客に納品する。顧客の約7割がスーパーで、納品規格となる1kg（5kg）25玉、30玉サイズが量産できると、生育環境のコントロールに配慮する。

豊通食料では、「国産の需要は今後も伸びる」と見る。品質に対する評価の高まりに加え、円安により価格差が縮小してきたこと、中国で韓国産のニーズが高まっていることなどが背景にあるという。ただ、そのために作付けを拡大するのはなく、県内や他県の同業との連携を図る。

1ト農業実証プロジェクトに参画。安定出荷と県産のブランド力向上のためには、他社間で連携した出荷体制の構築が必要であるとの考え方によるもので、連携のための情報共有ツールなどの開発のほか、3社共通のパッケージで生協やスーパーに供給する。

さらに、関東など県域を越えた連携も視野にある。これにより通年の安定供給の強化と、国内マーケットでの価格安定化をめざす。

昨年は、宮城県内でパプリカを生産するデ・リーフデ北上、デ・リーフデ大川（ともに石巻市）とともに、農水省のスマ